

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



白保中学3年生の荻堂夢璃菜<sup>おぎどう ゆりな</sup>さんを撮影させてもらったのは、2017年のお盆の時だった。白保在住の友人に声をかけてもらい、白保子供アンガマの裏方のお手伝いをしに行った時のこと。夢璃菜さんは当時11歳、「個性的で存在感のある子だな」というのが私の最初の印象だった。

白保獅子保存会に憧れる小学生の男子には、白保子供獅子会が存在している。一方、女子には踊りなどを披露する場は無く、夢璃菜さんは「なんで男の子たちは、お盆に獅子舞とかあるのに、女の子は何もないの?」という素朴で率直な疑問を抱き、夢璃菜さんのお母さんがその疑問に応えようと地域の人達に呼びかけ、皆の協力の下「白保子供アンガマ」を結成させた。

友人宅の一番座と二番座に溢れ出すように子どもたちが集い、お互いに手伝いながら着付けをしたり髪を結ったりしている姿は生き生きとしていて、これから始まることへの心の高ぶりを間近で共感したのを鮮明に覚えている。

先日、夢璃菜さんと「白保子供アンガマ」について少し話をする機会があった。

「お面を被るウシュマイとンミの時は、喋り方が難しい。一緒に活動しているメンバーは、幼稚園生から中学生までと年齢が離れているので、どうやったら皆んなで上手くできるかを考えることもやりがいが多かった。来年からはメンバーとして参加はできなくなるけれど、応援したいと思っている。真剣にやることも大事だけど、何よりも一番楽しんでほしい」と今までに感じてきたことや、メンバーへの想いを聞かせてくれた。

男の子であろうと、女の子であろうと、活躍できる場を望んでいるならば、叶えればいい。「その場を作ろう」という精神と行動力は、夢璃菜さんたちの未来にどのような影響を与えたのだろう。日々の小さなアクションは、未来の大きな波を作るきっかけになると私は信じている。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。